

夏季高温年における稲体窒素栄養状態と白未熟粒の発生傾向

【概要】

- 1 令和 5 年及び 6 年のような夏季高温年では、水稻玄米に白未熟粒〔基部未熟粒、乳白粒、腹白未熟粒（背白粒を含む）〕が多発し、整粒歩合の低下がみられます（図）。
- 2 このような年においては、出穂期の稲体窒素吸収量が高いほど白未熟粒の発生が少なく、整粒歩合が高まる傾向がみられます（図）。
- 3 一方、玄米タンパク質含有率は、平温年（令和 4 年）と同様に、出穂期の稲体窒素吸収量が高いほど増加します（図）。

【試験データ等】

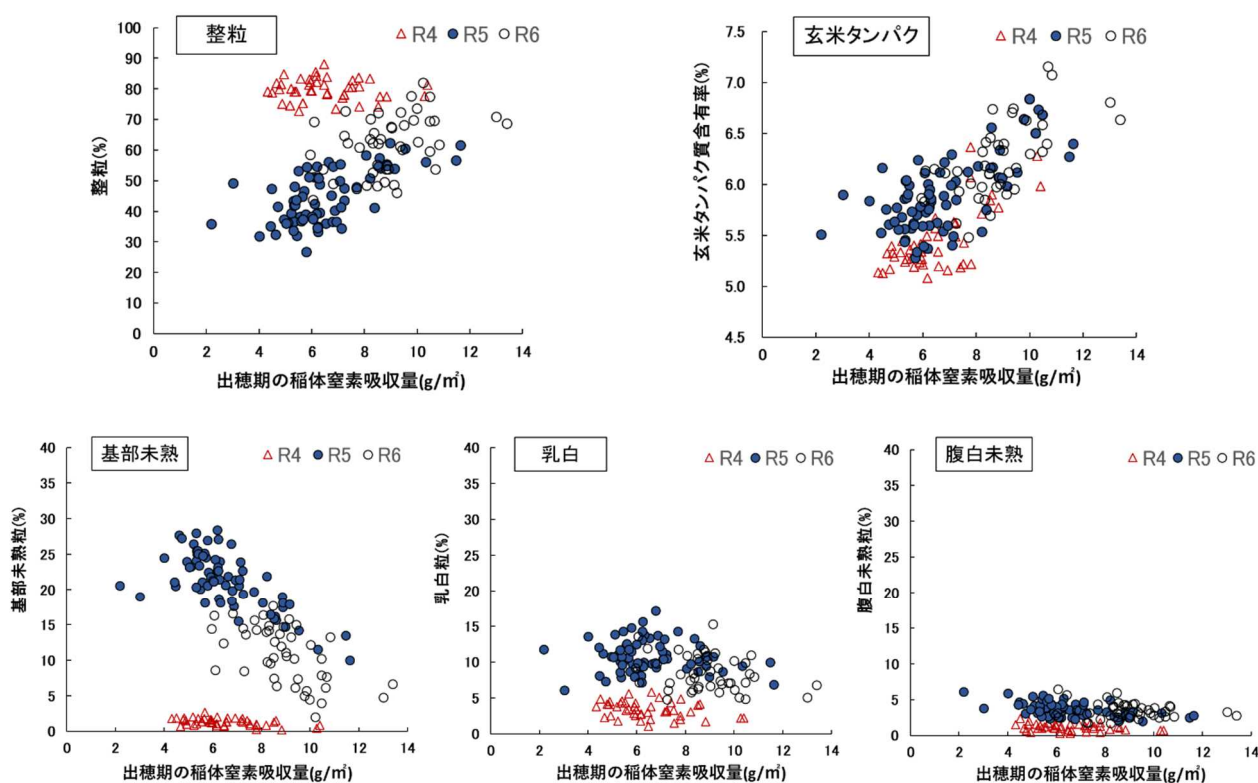


図 出穂期の稲体窒素吸収量と玄米品質の関係

- ※ 1 令和 4～6 年度に岩手県農業研究センター内で行った「ひとめぼれ」の施肥試験結果を解析。
- ※ 2 出穂後 20 日間の日平均気温は、R 4 : 24.4°C (平年差 +0.2°C)、R 5 : 28.0°C (平年差 +3.6°C)、R 6 : 27.5°C (平年差 +3.1°C) である（平年値は H 3～R 2 の 30 年平均）。

【令和 6 年度成果】夏季高温年における稲体窒素栄養状態と白未熟粒の発生傾向（R6-指-03）